教行信證（證卷・眞佛土卷）

西谷順誓

教行信證（證卷・眞佛土卷）

西谷順誓

目次

第一章　證を中心として……三
第一節　信證直接……四
第二節　往生卽成佛……八
第二章　第十一願文……一一
第一節　現益正定聚……一一
第二節　涅槃界の光景……一五
第三章　還相廻向……一九
第一節　第二十二願文……二〇
第二節　還相攝化の相狀……二三
第四章　身土不二觀……二五
第一節　光明と壽命……二五
第二節　彌陀大悟界……二八
第五章　佛性の開顯……三四
第一節　佛性觀一班……三五
第二節　開顯の過程……三八
第六章　眞俗二諦觀……四四
第一節　日本佛敎の傳統的精神……四五
第二節　宗祖の獨創的敎義……四七
第三節　二諦の本質と分化……五一
第七章　敎行信證敎義の特異性……五六

第一章　證を中心として

證卷と眞佛土卷とは、行・信の因に酬ゐた、果上の證をあらはしたまふたのである、此處に至るといふことが、眞宗の目的であつて、今この二卷において、この究極目的を、くわしくあらはされてある。まづその證をあらはすのに、二卷を以てせられたといふことを味はねばならぬ、すなはち證卷の方は、往生淨土といふ側をあらはし、眞佛土卷の方は、成佛といふ側をあらはされたものである。この二つは眞宗の敎義では同時であり、往生卽成佛であるが、佛敎一般の考え方では、往生といふことは、佛の世界に生れるといふことであり、成佛といふことは佛になることである。この二つの事實の間には、時間的にも初後があり、證の內容にも、等差があると見るのであり、從つて往生といふことには、さう大して重きを置かない、成佛といふことを、最大目的とするのである。

かういふ考え方は、一般に淨土といふところを、さう結構なところと考えない通佛敎では、當前の歸結であるが、眞宗では淨土を以て此上なしの世界と見て、そこに到りさへすれば、その場所の德として、ひとり手に成佛ができるやうな仕掛けになつてゐると見る當前の歸結として、往生卽成佛を談ずるのである。かやうな仕掛けは、

淨土の主でまします、阿彌陀如來の本願の誓約にもとづくもので、單なる衆生の想念でないから、その事を本願の基礎にすわつて說かれるのが、この二卷のこゝろである。

第一節　信證直接

一　まづ證を中心として考えなければならぬことは、前に向つて、信との關係である。すなはち信の次に、すぐに證の來つてをるといふことであるが、これはこの御書のあらはすところの特異點の一つで、眞宗教義だけがもつ、大きな誇りである。名けて信證直接といふのであるが、眞宗の行者は、これを當前なことに考えて、眞宗といふものは、こんなものだと思ふてゐるが、佛教の通念からいへば、實に破天荒な革命とでもいふべきである。何となれば佛教のいづれの宗旨にもつて行きてみても、修行がなくて、信心一つで證を開くといふことを談じてゐないからである。ところが眞宗では、行を拔きにして、信一つで證に至ると說くのである。どういふ譯で、信一つで問題が解決するかといふことは、すでに信卷の講讚において述べ了つたことであるが、要するに眞宗の信は、單なる發菩提心程度のそれではなく、信の內容には、完全に行が具してをり、いはゆる信行不離だけでなく、信行不二の信であるからである。

二　われ〳〵の側では、何ら修行をした覺えもないが、如來の行が完全に具備し、むしろ如來の行の結晶たる名號をおのが所有とさせて頂いたのが信であつてみれば、信といふまゝが、行なのである。むしろ如來のお手元に、完成したまひてある行を、われらに受領したところに、信といふ名を付けたものであると、考えて差支のないだけの信なのである。いかに唯信正因を談ずるにしても、行の伴なはない信は、果を招くだけの力がないから、どうしても行と組み合はさなければならないのである。しかるにその行は、われの稱ふる稱名念佛、もしくはその他のいろんな、三業の動作にかゝるやうなものであつてはならないのである。かやうなものは、すべて唯信正因の名を冒すもので、他力眞宗の意義に合致しない。ところがわれらの信を、子細に吟味してみると、全く如來の完成された行の結晶たる、名號と不離不二である、實はさういふことが、われらの信を發す所以なのである。

三　かやうな意味において、われらの信、すなはち如來の行なのであつて、信のいたゞかれた端的から、臨終の夕にいたるまで、いつも信と行とが、具備してつゞいてゐるから、われらは因として何ら缺ぐるところなく、往生の果を招くことができるのである。これが往生のできる理由であるが、往生の決定するのは、信をいたゞいた端的である。それはまたどうした譯であるかといへば、臨終の夕までつゞく信も、いたゞいた端的の信も、如來の行を全領したものであるから、本質的には全く異なるものではない。すなはちこの端的の信に、招果の全力が、完全に具備してゐるから、そのときを以て、往生決定の時期とするのである。之を一念業成と稱して、唯信正因の根本的理由とするのであるが、その事を最も力說されたのは、覺如上人であつて、親鸞聖人のうへでは、

その萠芽を諸所に見ることができる。例へばこの御書で申せば正信偈に「能く一念喜愛の心を發せば、煩惱を斷ぜずして涅槃を得る」といはれたるが如き、信卷末の初から、一念のお釋があり、その一念の信を「金剛の眞心を獲得する者は、横に五種八難の道を超え」る信だと云ひ、さらにその意味をくわしく說いて、「斷といふは、往相の一心を發起するが故に、生として受くべきの生なく、趣としていたるべきの趣なし、六趣四生の因亡し、果滅するがゆへに」等々。

四　すでに如來の行をいたゞいたのが信だとすれば、信の端的を以て、われらは如來とひとしく、すなはち如來である、といふことができるといふ考え方もあるが、これは眞宗としては僻見であつて、許されぬことになつてゐる。のちには滅度密益だとか、一益法門だとかいふ、名稱を以て呼ばれ、すでに宗祖の御在世中から、可なり根强い勢力をもつてをつたらしい。かうした考は、非常な理想主義であるから、今日でも理智的な人に、歡迎されるけれども、實際の生活に合致しないのである。果して信に入つたばかりで如來ならば、身心兩方面の生活が、全く信前と異なつて來ねばならぬ、さういふ者は一人も居ないから、本當に信を得たものは、一人も居ないことになるが、かやうな難行道なら、眞宗も聖道門もおなじことである。眞宗は易行道である、この世では、ともても成れない佛の證などを目的とせず、阿彌陀如來が、淨土に往生させてから、佛にして下されるといふ誓願に投託して、この世では、かゝる確定的な地位に、安住することを歡ぶのみである、これならば、誰れでも入られる信である、またこれでなければ、われらの生活に合致しない。信を得た時に佛になつて了はれては、人生は潰滅して了ふ、それでは救濟とは云はれぬ、人間を人間のまゝで安住せしむるのが、救濟である。

五　いま述べたやうな狀態が、正定聚不退轉の境地である。ところがこの名稱を、他流では往生淨土直後の地位としてゐる、即ち淨土に往生して、すぐに正定聚不退轉位に位してから、すゝんで成佛位にのぼるのだと說くのである。これは阿彌陀如來が、われらに向つて往生淨土の誓約をあそばされた第十一願文を、文字通り讀むとさういふ解釋になるのである。

第十一願文　說我得佛國中人天不住二定聚一必至滅度上者不レ取二正覺一

之を文字通りに訓めば、「たとへわれ佛を得たらんに、國中の人天、定聚に住し、かならず滅度にいたらずば、正覺をとらじ」となり、定聚も滅度も、往生後の證の始終と解するのである。然るに宗祖は、正定聚不退轉を現益とし、而も入信同時の益としたまふた、したがつて滅度のみが淨土の益となる譯である。かうした第十一願文の見方も、また宗祖獨特のもので、これにはしかるべき理由も、曲據もある次第であるが、之は次の第二章の下でのべることにする。要するにその正定聚の方は、眞宗では現益とするのであるから、信卷の末の範圍に屬するものであり、いまの證卷は、たゞ滅度の側のみをのべられてある。

第二節　往生卽成佛

一　次にこの證卷を、後の眞佛土卷に向つて、證と眞佛土との關係を考へたとき、成立するのが往生卽成佛の義である。往生といふのは、往生淨土の略であつて、迷悟を相對し、現未を相對し、捨此往彼を立て前とする、淨土敎の通念として、現に苦穢の充滿せる此の迷界から、未來に快樂安穩なる、彼の悟界に更生するのが往生である。そのとき速時に本佛の彌陀と、全く形式內容を同じくする證果に住せしむるとなす、これ第十一願の誓約であつて、一に如來のお計らひによるといふの外はないのである。理屈をつけて見れば、いたゞいた信心に、さうした仕掛がしてあるとも、淨土の土德としてさうなるのだとも、願力のおん催ほしだともいふことができるので、いづれにしても如來の御計らひといふの外はない。かやうな往生卽成佛の悟界の內容は、第十一願だけでは、あらはれがたいやうに、第十二願・第十三願の兩願のにより、これら誓約にしたがつて、光明無量と壽命無量との、功德を圓かに具足せしめらるゝ事をあはすのが、證卷の次に、眞佛土卷の來る所以である。

二　すでに如上の關係があるから、略文類には證を明して、眞佛土は明したまふてない、すなはち證中に攝められたものである。そこで證といふのは、光明無量・壽命無量の證だといふ意味である。ところがこの二つの無量は、阿彌陀如來の果德を代表するものであつて、眞佛土卷の內容は、ひとりこの二つの無量のみならず、阿彌

陀如來の果德をあらはすために、ながゝと涅槃經を引いて、佛性問題にまでも言及し、しかも之がこの卷の中心問題なるが如き觀を呈してゐる。而してこの佛性の光りの無限性を、光明無量となづけ、この佛性の命の永遠性を、壽命無量となづけられたとも解しうるやうな、說き方になつてゐる。然りしかしてかうした佛性を、全的に見屆けることのできる世界が、阿彌陀如來の淨土であるといはれてある。卽ち同二十九丁左に

爾者如來眞說宗師釋義明知顯二安養淨刹眞報土一惑深衆生於レ是不レ能レ見レ性所レ覆二煩惱一故經言二我說三十住菩薩少分見二佛性一故知到二安樂佛國一卽必顯二佛性一由三本願力廻向一故

この文はこの卷の中心をなすと見らるべきもので、意味すこぶる深長であるが、要するに往生（證）しさへすれば、佛性を全的に見屆ける（成佛）ことができるといふことをいはれたものである。

三　かくの如き證が、眞宗の證であるばかりでなく、また實に身土不二の證であることも、眞佛土卷の冒頭においてあらはされてある。

佛者則是不可思議光如來土者亦是無量光明土也

佛身と佛土とは、しばらくも離れず、佛身の住したまふところが佛土であつて、佛土は佛身の德に順ふものである。このことはわれらの境界においても、或程度までさうなのである、すなはちその人によつて、住む家や居る所が、改善も改惡もされる、「其心の淨なるに隨つて、すなはち佛土淨かなり」といへる維摩經の語は、佛身

佛土の不二の理由を、佛心に歸して談ぜられたものであるが、諸佛の境界は、佛だけの德としては、まさに然るべしとするも佛の如く往生人をして、同じ德を具へしむることは、阿彌陀如來ばかりである。これは第十二・第十三の誓願の賜もので、佛の如く往生人も亦た、身土不二なるを得るのである。この兩願は、佛身の光壽無量を、誓ひたまひしものであるけれども、その佛身に順つて、佛土も亦た光壽無量でなければならぬことは、上述の如くである。その上に國中の人天をして、おなじ功德を得しむるとの誓約であるから、この兩願によりて、われらには往生卽成佛と、身土不二との、二重の益が與へらるゝのである。

第二章　第十一願文

證卷のお釋の土臺になつてゐる　第十一願文（第一章第一節所引）には、正定聚と滅度との、二つを誓ひたまふてあるが、その中で正定聚の方を、現在において得るところの卷とし、淨土における益は、滅度のみとし、この願を「必至滅度の願」と名けられたのは、親鸞聖人の第十一願である。かゝる特殊の見方をせられた理由は如何、之れについては、まづ正定聚を現益とせられた理由から、明かにしなければならぬ。さうしてその理由が明かになつた上で、願文の正定聚をどう解くか、また滅度の證といふのは、どんなものであるか、それ等の點を明かにすれば、大たい證卷に謂ゆる證の一面、自利の側はわかる次第である。

第一節　現益正定聚

一　これは問題の性質上、信卷におさむべきものであるが、言葉の出據が、第十一願文であるから、こゝにゆづつた次第である。しかも眞宗においては、正定聚といへば、證中の益とせず、現益にきまつてゐることは、だれも知つてゐることである。一たい正定聚とは、滅度の證を開くことに、正當に定つた仲間といふ意味であるが、

その定まるといふのは、いつ定まるのであるかゞ問題である。來迎に重大意義を認める、淨土の異流の所談からいふと、來迎をうけて、往生が定まり、往生したときに、正定聚に住し、さうして滅度にいたるといふ順序になるのである。眞宗では信の成立は、佛因の領受を意味するゆへ、何も來迎をまつ必要がない、もし來迎を言はんと欲せば、臨終に非ず、平生から攝取の光明中におさめられ、常來迎をうけてゐるのである、經に臨終來迎を說かれたのは、平生の來迎が顯はれるまでのことで、臨終の時、始めて來迎にあづかるのではない、卽ち臨終始來にあらずして、顯現來迎なりと談ずるのである。かやうな攝取の狀態が、正定聚不退轉のことで、いづれも信の成立と同時にうるところの益である。

二　これは信の獨立を宣示する信心正因の宗敎として、まことに當然すぎるほど當然なことである。しかしこの理論を基礎づけるには、然るべき指南を七祖の上に求めなければ、宗祖としては承知ができない。それが龍樹菩薩の易行品であつた。易行品は全體として、正定聚現益論である、「若し菩薩、此身において阿維越致地（正定聚）にいたることを得て」（品三丁右）といへるものはその意である。そこで宗祖は正信偈の龍樹章において、「彌陀佛の本願を憶念すれば、自然に卽の時必定（正定聚）に入る」と、正定聚現益の指南者は、龍樹菩薩なることを示唆せられてある。之れによりて第十一願文を見たまふに、願文をいつでも、成就文と對照せらるゝのが、宗祖の釋風になつてゐるが、成就文にも、正依の意味を異譯（唐譯如來會）で味はふといふのがまた宗祖の釋風である。そこで正依と如來會との成就文を檢討するに

正依（魏譯・無量壽經）成就文

其有衆生生彼國者皆悉住於正定之聚所以者何彼佛國中無諸邪聚及不定聚

異譯（唐譯・無量壽如來會）成就文

彼國衆生若當生者皆悉究竟無上菩提到涅槃處何以故若邪定聚及不定聚不能了知建立彼因故

一念多念證文に、宗祖正依の成就文を左のごとく訓みたまふてある。

それ衆生ありて、かのくにゝむまれんとするものは、みなことゞく正定の聚に住す、ゆへはいかんとなれば、かの佛國のうちには、もろ〳〵の邪聚、および不定聚は、なければなり。

原文の「生彼國者」を「かのくにゝむまれんとするものは」と訓んで、この界における淨土願生の行者としてあるが、この原文ではどうも技工にわたるやうだが、そこを異譯に對照すると、決して不當でないことがわかる、卽ち異譯の訓み方は左の如くである。

かくのくにの衆生、もし當にむまれんもの、みなことゞく、無上菩提を究竟し、涅槃のところにいたらしめん、なにをもてのゆへに、もし邪定聚及不定聚は、かの因を建立せることを、了知することあたはざるがゆへなり

原文の「若當レ生者」を「もし當にむまれんもの」と訓むは、文法上妥當であるが、これはこの界より、未來の往生を當視したものである。このことは後の方に至りて、かの因を建立するものは、邪定聚や不定聚ではない（卽ち正定聚である）と、いはれてあることから逆見して、一層明了となる。何となれば邪定聚や不定聚は、この界の衆生に局るのであるが、之れに對して正定聚のものこそ、彼の因（信心のこと）を建立するといはれたのは、矢張り此界における、入信の機を示唆せるもので、なくてはならないからである。

三　かやうに異譯によつて正依を解し、これら二つの成就文を以て、根本の第十一願文を解したまふたのが、一念多念證文における第十一願文の訓み方である。（願文は旣出にゆづる）

たとへわれ佛をえたらんに、くにのうちの人天、定聚にも住して、かならず滅度にいたらずは、佛にならじ。と

「にも」の送り假名を、定聚に付けられたのは、すでにこの界に居たるときに、住するところの位であつたものが、かの界において示現したるものなることを、示唆せられたものである。かうした示現の果報は、敢へて正定聚にはかぎらない、もろ〳〵の願にある「國中の人天」も亦た然りで、一味平等な佛果を得たものが、この界に居りし時の、それ〳〵の姿を示現して、法味樂を受けるといふ淨土觀が、天親菩薩や曇鸞大師によりて談ぜられた廣門示現の相なのである、地獄や鬼畜の惡相こそないが、人天以上の諸相が、淨土の中にあると聞いて、われ〳〵は一種の親しみを感ずるのである。かうした對機施設門が廣門示現であつて、事實は一味平等の無上涅槃に住するのである。だから正定聚とても、矢張り示現相であつて、事實はこの界において、得たるところの益であることがわかるのである。

第二節　涅槃界の光景

一　願文にあらはれた二益の中、正定聚を現益とする眞宗では、滅度のみが彼の土の益なることが明かになつた、そこでその滅度の果相とは、如何なるものなりやを說かねばならぬ。この卷の初めに「難思議往生」といはれてある、思想しがたく、論議しがたし、との意味であつて、語はもと善導の法事讚（上四丁左）に八回も出でたる三往生（難思議往生樂・雙樹林下往生樂難思往生樂）の一つにとられたものである。この三往生の見方はいろ〳〵あるが、宗祖は、三經に配當して、雙樹林下往生は觀經往生、難思往生は彌陀經往生、この二は方便化土の往生とし、難思議往生は大經往生で、これが眞實報土の往生だといはれてゐる。三經往生文類にこの大經往生を明して

大經往生といふは、如來、選擇の本願不可思議の願海、これを他力とまうす、これすなはち念佛往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり、現生正定聚のくらゐに住して、かならず眞實報土にいたる、

これは阿彌陀如來の、往相廻向眞因なるがゆへに、無上涅槃のさとりをひらく、これを大經の宗とす、このゆへに大經往生とまうす、また難思議往生とまうすなり。

と、すなはち大經の宗とするところの往生といふ意味だといはれてある。宗とは異本には宗致としてあつて、大經一部の肝要かなめのこと、それは「念佛往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり」といふにある、さらに云ひかへて「現生正定聚のくらゐに住して、かならず眞實報土にいたる」ことだといはれてある。その眞實報土を「無上涅槃」といふ、これが難思議往生だとの御指示である。

二　無上涅槃をこの卷の初めに釋したまひて、常樂・畢竟寂滅・無爲法身・實相・法性・眞如・一如といはれてあるが、これはいづれも佛教學の通念では、宇宙の根本原理を象徴したもので、佛以外には知ることのできない世界であるとされてゐる。だから誰れでも、佛になりさへすれば、知ることができる道理であるが、聖道門では、すでに成佛の道が絶えて了つてゐるから、この世界を知る方法としては、たゞ淨土他力の眞宗より外はない、そこが大經の宗といはれた所以である。さうしてまたかゝる宇宙の根本原理は、佛になりさへすれば、究める道理であるけれども、諸佛の中では、眞にその理を究め、眞にその理に達したまひし佛は、阿彌陀如來ばかりなりとするのである。これ阿彌陀如來を以て、諸佛中の極尊といはれ、本師法王と稱せらるゝ所以である。故に上述の常樂乃至一如の世界は、阿彌陀如來のお證にとり切つて了ふのが、宗祖のお考であつたやうである。從つて諸佛も、かゝる世界をきはめんとすれば、矢張り彌陀法に歸したまはねばならぬといふのが、淨土和讃の「十方三世の無量慧、おなじく一如に乘じてぞ、二智圓滿道平等、攝化隨緣不思議なり」のこゝろである。覺如上人が口傳鈔の第十五章に「眞宗所立の報身如來、諸宗通途の三身を開出する事」として、彌陀が本師法王であることを解かれてあるのは、このこゝろである。

三　ともかくも阿彌陀如來のみが、通達したまひし世界、または阿彌陀に歸したるものゝみが、證に入る世界を無上涅槃と申すのである、之を自然法爾章に宗祖は、「無上佛」となづけ、なほ之を解いて

無上佛とまうすは、かたちもなくまします、かたちましまさぬゆへに、自然とはまうすなり、かたちましますとしめすときは、無上涅槃とはまうさず

とある。この「かたちましまさぬ」とは、世間でいふやうな無形のことではない、佛以外のものでは、測量しうるやうな、かたちではないといふことである、すなはち謂ゆる難思議のことである。このことを又、唯信鈔文意には「法性法身」となづけ、その解に

法性法身とまうすは、いろもなし、かたちもましまさず、しかればこゝろもおよばず、ことばもたえたりといはれてある。法性法身は、曇鸞大師の論註（下二十五丁右―左）に出で、阿彌陀如來の佛身の德をあらはすのに、方便法身と幷べ稱せられ、その方便法身の側は、かたちのある側、いろのある側、法性法身の側は、かたち

のない側、いろのない側とせられてある。「かたち」や「いろ」といふのは、三種莊嚴二十九種の差別相を、展開したるところをいはれたもので、之を廣門示現の相とするのである。大經に本願成就の彌陀の果德を讚嘆せられてあるのはこの側である。しかるにかゝる廣門示現の相が、みなそれ〳〵絕對のものにして、佛以外のものが、測量しうるやうな、相對的な存在ではないのである、卽ち絕對に統一されたもの、絕對のものである。その德を法性法身と稱し、「いろ」「かたち」を超越したものといはれてある。これを略門一法句と云ひ、差別相に卽した平等一如の世界である。かやうな廣門示現の相と、略門一法句とが、融卽した微妙不可思議の世界、これを難思議往生となづけ、廣略相入の世界といふのである。そこでこの卷にあらはしたまふ「證」といふのはわれらのさとりではあるが、そのまゝが阿彌陀如來のおさとりに、合一する世界であるから、そのことを詳しく解かんがために、第五卷の眞佛土を必要とするのである。眞佛土にはいまいつたやうな、廣略相入の狀態を詳說せられてある。

第三章　還相廻向

教卷の冒頭に、淨土眞宗とは、二種の廻向を明すの宗旨であるといひ、その往相廻向の中を、敎・行・信・證の四法に分ち、卷を分ちてその一つ〳〵を詳釋し來り、いまの卷に至りて證を明してあるが、しかも肝心な證のお釋は、僅々五紙に滿たず、あとの二十三紙は、還相廻向のお釋となつてゐる、だからこの卷は、事實上還相廻向の卷なるが如き感がある。

淨土眞宗
- 往相廻向
  - 敎
  - 行
  - 信
  - 證
  - 從因向果—向上門—自　利
- 還相廻向
  - 從果向因—向下門—利　他

卽ち證卷は、往相廻向と還相廻向との、二廻向に跨つた卷とせられてゐる、往相廻向の側は、自利の無上涅槃界の果報を意味し、還相廻向の側は、利他の敎化地の活動を意味するが、その前者は後に眞佛土のお釋を以て詳しくせらるゝゆへに、この卷では利他の還相廻向を詳釋せられたものである。證果の內容が、かやうに自利と利他とに分れるのは、信心の因の中に願作佛心と度衆生心とが、融和してをり、その因から招きたる證果である

からであつて、遠く天親菩薩や曇鸞大師の論釋にあらはされた、入出二門の法義を承けたまひしお釋である。

第一節　第二十二願

一　還相廻向の願は第二十二願である、夙にこの願に着眼せられたのは、曇鸞大師であつて、論註の三願的證のお釋（下卷・三十四丁右―三十五丁右）の下に引かれてある、曰く

たとへわれ佛を得たらんに、他方佛土の諸の菩薩衆、我國に來生せば、究竟してかならず一生補處にいたらん。その本願自在の所化、衆生のための故に、弘誓の鎧を被、德本を積累し、一切を度脫し、諸佛の國に遊で、菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、恒沙無量の衆生を開化し、無上正眞の道を立せしめんをば除かん。常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の德を修習せん、もししからずは正覺をとらじ

願文が非常に長く、内容が複雜であるが、大たい二つの事を誓はれてある、初めは往生人の住する位を、「一生補處」ならしめんといふ、この次には佛になりうる位に、住せしむとの意である、これはもちろん、一味平等の佛果を證したる上の、廣門示現相であることは、すでに述べた通りである。「その本願」から已下が、還相廻向である、宗祖のこの卷のお釋の意味では、「一生補處」よりも、還相廻向の方に重きをおかれてあるやうだ。

二　「その本願」から下の、願文の意味を解せば、希望にしたがつて、衆生濟度のために、自由自在に活躍せしむるであらふ、また一切諸佛の國に至り、諸佛を供養せんとするものには、その志願を滿たさしむるであらふ。かゝる化他と供佛とをなさんとする者は、必ずしも補處位に住することを要しないといふのが「除」の字の意味である。しかして「常倫諸地の行」から下は、かやうな補處位と化他と供佛との中で、化他の行の特異性を讃へられたもので、普通並々な菩薩の行とは異なり、「普賢の德」と申して、菩薩でありながら、佛と等しき慈悲圓滿（普）智慧圓滿（賢）の、妙作用を示現することをいふ、かくの如くならしむることが、第二十二願所誓の目的である。

三　第二十二願の内容に、補處位と化他と供佛との中で、化他と供佛とは、化他しつゝ供佛し、供佛しつゝ化他する狀態が、願文にあらはれてゐるから、これは一つと見てもよいであらふが、初めの補處位と、どちらが發願の目的であらふか、といふ問題につきて、學者間にいろ〳〵な見解がある。しかるに補處位は、現生正定聚が、淨土の廣門位に、示現したものであつて、この示現の位には、菩薩の相もあれば、緣覺や聲聞の相もあり、天上界や人間の相もあつて、種々の差別相を現ずるところに、衆生界と親しみやすく、誘引する作用も、おのづからそなはりてゐる。してみれば示現相のまゝが、化他の作用をもつてゐる譯である。併しこれは往相と還相との二つの中では、往相に配當すべきもので、動と靜とでは、靜の側である。然るにかうした自利の側や、次の供佛の側は、四十八願の中では他の諸願にも、しば〳〵誓ひたまふ所であるから、この願の主要目的としては、矢

張り還相化他の、動的の側であるといはねばならない。そこで曇鸞大師は、この願文を引き終つたところに、「佛の願力によるがゆへに、常倫諸地の行に超出し、現前に普賢の德を修習す」と結ばれてある。

第二節　還相攝化の相狀

一　いふまでもなく還相廻向とは、われらを淨土に往生せしめたる上にて、十方有緣の世界にあらはれ出でゝ衆生濟度の大用を行ぜしむることである。大乘佛教の佛果の特色は、自利々他圓滿といふことであるが、いまこの第二十二願は、その狀態を、最もよく描寫されてある。しかれば如何なることをして、還相の大用を行ずるのであるが、これについてはこの卷には、天親菩薩の淨土論や、曇鸞大師の論註の文を引いてくわしくあらはされてある、卽ち五丁左より二十三丁左までが、みな論と論註の引文で、殊に論註下二十丁から三十三丁までの全文を引かれてある。この所引の文の內容は、非常に廣範圍にわたり、論註下卷十章の中第三の觀察體相章の一部から、第四淨入願心章、第五善巧攝化章、第六障菩提門章、第七順菩提門章、第八名義攝對章、第九願事成就章、第十利行滿足章の前半に至るまでゞある。よつてこの各章の梗概を解けば、宗祖がかゝる廣範圍をお引きになつた思召もおのづからうかゞはれるのである。まづ初の觀察體相章は、菩薩（願生の行者のこと已下之に準ず）が、彌陀の淨土の三種莊嚴二十九種功德の有樣を對象として、信心を發起することを明されたもので、その中の佛莊嚴に八種ありて、第八の不虛作住持の功德といふのが、ひとり佛の功德のみならず、二十九種功德全體の中心であるが、こゝに阿彌陀如來の絕對他力の救濟が、遺憾なくあらはれてゐるのである。この卷の引文は、その不虛作住持の功德の中で「卽見彼佛」といふ已下である、これは阿彌陀佛を信じたものゝ事を明された一段で、こゝに第二十二願が引證されてあるところから見ると、つまり補處位の菩薩の功德に相當するのである。その次に菩薩莊嚴の四種が列せられてあるが、これがやはり補處位と、還相化他の大用とに歸して了ふのである。故にこの卷に引かれた觀察體相章の文は、第二十二願文と內容を同じくするものと見てよいのである。

二　次に淨入願心章は、かやうな補處位に住することや、還相の化他の作用は、みな阿彌陀如來の願心より成就したまふところなりといふことを示されたものである。この下に廣略相入といふ、深遠な哲學的考察がめぐらされてある。次の善巧攝化から、次の障菩提門その次の順菩提門までの三章は、菩薩卽ち願生の行者が、利己の念を離れて、全く利他の念から修行して行く、無我の狀態を明したまふたものである。次の名義攝對章では、菩薩の修行が圓熟して、智慧と慈悲とが圓かに具はり、利他の作用が展開して行くことをとく。次の願事成就章では、かくの如くして、願生の目的を達して、往生したところをとく。而して最後の利行滿足章にいたり、菩薩因位の修行に酬ゐて、招きたる淨土の果德が、敎化衆生の外なきことを明されたものである。そこで已上この卷御引文の範圍を回顧するに、終始一貫利他敎化に在りしことは、果上の所證が又、その外になきことを示唆する

ものであつて、還相攝化の大用の出で來るや、決して偶然ではないことを示されたものである。

三　論註には一つの筆格があつて、諸佛といふは、諸佛の本師法王たる阿彌陀佛のことを示し、菩薩といふは、また阿彌陀佛の因位の法藏菩薩なることを示すのである。そこで上述の菩薩は、願生の行者の從因向果の過程を語りつゝ、しかも法藏菩薩の修行過程を示唆されたものである。それと同時に、かくの如くして成就された彌陀の果德を、ことゞく包含した存在が名號である、かやうな名號が、一心の信心となりて、われらの上に體得されるから、その信心にも亦た、かくのごとき功德を展開する力をそなふるものとするのである。故にこゝに引かれたる論註の文は、法藏菩薩の修行過程とも見られ、一心願生の行者の、往相の心行とも見られるのであるが、宗祖がこゝにお引きになつた目的は、還相廻向を立證するためであることは、云ふまでもない。すなはち往生後、常倫に超出して普賢の德を修する、その相狀は、かくの如きものであると、實例を法藏菩薩にとられたものである。

第四章　身土不二觀

眞佛土卷は、われらが證入させて頂く、涅槃界の光景を、一層くわしくとかれたものである、この卷のはじめに、光明無量・壽命無量の兩願を標げられてある、他の諸卷の例によれば、標願は、その卷全體の內容を總標するものであるから、この卷も、眞佛・眞土の光壽無量をあらはさるゝものであるべきに、本文の冒頭には、佛身・佛土の光明無量なることをあらはすのみで、光壽無量に觸れたまふてゐない。しかのみならず卷の內容は、佛身の說明を以て終始し、殆んど佛土のことは省略されてあるやうだが、これについてまづ、光・壽の關係をのべ、次に身・土の關係を考察しやう。

第一節　光明と壽命

一　標願の光明無量と壽命無量とは、いづれも彌陀佛身の功德であること、正依大經の第十二・第十三兩願文に照して明かである。願文に言く

第十二願文　設ひわれ佛を得たらんに、光明、よく限量あつて、下、百千億那由他の、諸佛の國を照さゞ

るにいたらば、正覺をとらじ

第十三願文　設ひわれ佛を得たらんに、壽命、よく限量ありて、下、百千億那由他の劫にいたらば、正覺をとらじ

この兩願が成就されて、無量壽佛・無量光佛と呼びたてまつる佛となりたまひしことは、大經に說かれ、その文は、いづれもこの卷に引用されてある。而して光明については、特に十二光まで開いて、その無量なる狀態を極言し、異譯の大阿彌陀經（吳譯）には（この卷四丁左所引）

諸佛光明中の極明なり、光明中の極好なり、光明中の極雄傑なり、光明中の快善なり、諸佛中の王なり、光明中の極尊なり、光明中の最明無極なり

と讚美してある、ゆへにこの卷、初めに二願を標しながら、次に光明を以て、身・土の德とし、「佛とは則ちこれ、不可思議光如來なり。土とは、またこれ無量光明土なり」といはれてある。

二　ところが、大經を通覽するに、阿彌陀佛を呼ぶに、無量壽佛を以て普通とす、正依（魏譯）は勿論、如來會（唐譯）も莊嚴經（宋譯）も、亦た無量壽佛にして、譯出の新らしきものは、みな無量壽佛で統一されてゐる。最も古き譯の平等覺經（漢譯）は無量淸淨佛となり、その次の譯出にかゝる大阿彌陀經（吳譯）は、阿彌陀佛である。梵本の大經は、無量光佛で、阿彌陀經は正依も梵本も、無量光・無量壽併用されてゐる。そこで原名の阿彌陀佛の外には、譯名は、無量壽佛を通名とし、無量光佛・無量淸淨佛の異名がある、といふことが明かである。この中無量壽は體につき、無量光は用をあらはし、無量淸淨は相をあらはされたものであるやうだ。かやうな譯であつてみれば、體の無量壽を以て、眞佛の德をあらはし「佛とはすなはちこれ、無量壽佛なり」とあつて、然るべきやうにおもはれるが、特に光明を以てあらはされたのは、光明の無量なることをあらはせば、體の壽命の無量なることは、おのづからあらはれるのである。

三　また光明には調熟や、破闇や、攝取不捨等のはたらきがあつて、そのはたらきの側から、十二光（魏譯）・十五光（唐譯）・十三光（宋譯）・十九光（梵本）等の異名もあつて、佛力の威大性を象徵するに、最もふさはしい邊もあるのである。それであるから大經で、佛名は無量壽佛となつてゐるのに、說明では無量光佛の方が、はるかに委曲をつくされてある、壽命の說明は、どうもあれ已上にはしかたがないであらふ。七高傳にくだつても、龍樹菩薩は無量光明慧（易行品彌陀章の偈）といはれ、天親菩薩は「盡十方無碍光如來」（淨土論の偈）といはれ、曇鸞大師も、讚彌陀偈（この卷二十二丁左所引）の初めに、十二光により光明を以て讚嘆せられてある。宗祖これによつて、造られた四十八首の和讚も亦た光明の諸德をたゝえられてある。この御書も略文類も、おなじく開卷第一が、光明を以て起筆されてある。

四　それはそれとし、光壽を以て、佛德を代表せしむることは、佛おんみづからの本願にあらはれたるところ

であるが、その他にも色々な理由があるといふことを、古來學者の諸註に列擧してゐる、峻諦師の大經會疏に四義、智暹師の本典樹心錄に六義、桃溪師の正信偈文軌に五義、道隱師の本典略讃に五義、慧鑑師の小經弊等錄には十三義を出してあるが、その中で樹心錄に「衆生の所欲に適す」といつてあるのは面白い。所欲とは、志願希望である、生命欲の滿足と、知識欲の滿足とが賦與さるゝことは、衆生誘引の無二の方便でありうるのである。佛これを以て本願としたまふもの、すなはち我らの好むところに隨つて、我らを利樂したまふものである。無量壽無量光の譯名を有する阿彌陀佛が、古來なかく佛教界信仰の中心となり、支那において無量壽經の譯出が、前後十二回まであつて、最大多數の愛讀者を有したことを立證してゐる所以も、肯かるゝやうである。

第二節　彌陀の大悟界

一　この卷の初頭に、彌陀大悟界の光景を描出して、佛身も佛土も、ともに光明無量なりとせられてある。佛も光りにして、土も亦た光りなりとの謂である。蓋し光りに對する崇仰の念は、印度に生れた宗教神觀の大特長であり、無量壽佛と呼びながら、無量光を以て讃えられた、大經の彌陀觀は、かゝる印度思想を、如實に反映してゐるものゝ如く、現流の梵本にも、無量光となつてゐる。佛は能照にして、土は所照の關係にあるが如き、佛身と佛土とは、いつしか能所の差別を超えて、光りそのものに合一した存在として、描出せらるゝに至つたのである、華光出佛の經文がそれである。

またもろ〳〵の寶の蓮華、世界に周滿せり。一々の寶華に、百千億の葉あり、その華の光明、無量種の色あり。青色には青光、白色には白光、玄黃朱紫、光色はまた然り、暐曄煥爛にして、日月よりも明曜なり。一々の華の中より、三十六百千億の光をいだす、一々の光の中より、三十六百千億の佛をいだす。身色紫金にして、相好殊特なり。一々の諸佛、また百千の光明を放ち、あまねく十方のために、微妙の法をときたまふ。

淨土和讃に、之を讃述して、

一々のはなのなかよりは、三十六百千億の、
光明てらしてほがらかに、いたらぬところはさらになし。
一々のはなのなかよりは、三十六百千億の、
佛身も光もひとしくて、相好金山のごとくなり。
相好ごとに百千の、光を十方にはなちてぞ
つねに妙法ときひろめ、衆生を佛道にいらしむる。

無量の寶華より、無量の光明を放ち、その光明より、また無量の佛身を出し、その佛身にまた、無量の光明があ

つて、華も佛も、光明に麗化し、無二一體となりて、微妙の法を演說し、衆生を濟度するのである。

二　かくの如き光りとしての存在が、佛の身土であるといふことは、最高の理想鄉なることをあらはすものであらふ。前に引いた大阿彌陀經の文中、極明・極好・極雄傑・王・極尊等の、最上無上を意味する言葉で表現されたのは、おそらくその意であらふ。理想を光明であらはすことは、世間においてもまた例のあることであるが、その理想の光が、現在では理想的でないところのものを、遂に理想的ならしむるものであるから、理想は到達境であつて、而も案內役や誘導役をもなすものである、目的と同時に方便でありうるのである。第十一願の必至滅度の願の次に、第十二願の光明無量の願がある、この兩願の次第を味ふてみると、そのことがよくわかるのである。卽ち第十一願は、衆生をして涅槃界に至らしむるとの誓約である、然るにその涅槃界とは、如何なる世界であるかといふことを、第十二と第十三との兩願であらはし、光壽無量の世界であるといふことを示されてある。この光壽の二德が、正依の大經でみると、阿彌陀如來の大悟界になつてゐるが、異譯を對照してみると、衆生の證入する世界だといふことが、極めてあざやかにあらはれてゐる。宋譯莊嚴經の第十願と、第十一願とがこれに相當する、第十願では

世尊よ、われ菩提を得、正覺を成じ已らば、所有の衆生をして、わが刹に生れ、一切みな無邊の光明を得て、よく百千俱胝那由他諸佛の刹土を照曜せしめ、悉くみな阿耨多羅三貌三菩提を得しめむ。

第十一の壽命無量の願も、同意であるから略するが、これが必至滅度の願によりて授けらるゝ、證の內容である。證の次に眞佛土を明したまふたのは、願の順序から申しても、すこぶる當然なことである。かゝる究極の理想境を目的とし、かしこに到達せしむるまでの、過程も亦た光明の作用によるのである。その作用が、佛身ばかりでなく、佛土の上にもあらはれ、寶の蓮華から出る光にも、說法度生の妙用を具へてゐるといふ側から、身土不二を談じられたのが、かの華光出佛の經文であると味はゝれる。

三　光明は闇黑の反にして、迷悟相對の悟をあらはす、しかも依正二報の全體が悟であつて、眞に生佛不二の大悟界なることをあらはすのが、佛も光り土も光りといふ、身土不二說である。悟とか覺とかいふ境地は、智慧から招來し、智慧の顯現である。曇鸞大師は「如來の光明智相」(論註上四丁左)とも、「佛の光明はこれ智慧の相」(論註下二丁左)ともいはれてある、智慧が體で、光明が相だとの謂であらふ。然るに身土不二は、身土ともに、智を體とすることをあらはすものなれば、かゝる智は眞智である、之を曇鸞大師は「眞智無知也」(同下二五丁左)といはれ、絕對の智が顯現した世界とせられた。智といふものは、差別相を確正に識別し批判する、心の作用であるが、差別相には、必ず平等の理性がうらづけてゐるのである。この平等と差別の兩面を、見究めた智慧を體としてゐるのが、如來の身土である。故に如來の身土にも、平等と差別との兩面があつて、互ひに相涉入してゐるのである。廣(差別)略(平等)相入といふのがそれである。淨土の三種莊嚴二十九種といふ差別相の

まゝで、阿彌陀佛といふお悟に統一され、そのお悟りのまゝが、三種莊嚴二十九種なのである。この廣略相入の狀態は、何であれ、一つをとれば、他のすべての存在は相卽相入するのである。これ身土不二の論據であり、また狀態である。

四　曇鸞大師は、天親菩薩が「彼の世界の相を觀ずるに、三界の道に勝過せり」といはれた淸淨功德を釋して、「この淸淨は、これ總相なり」（論註上七丁左）といはれ、阿彌陀如來の大悟界を、嘆じて「畢竟安樂大淸淨處」（同）となづくるとなし、その淸淨の相は「三界はこれ、汙染の相、これ破壞の相なるの如きにはあらざるなり」（同八丁右）と說かれてある。三界のごとく汙染の相がないとは、この三界は、「有漏心から生じて、法性に順ぜず」（同六丁左）といはれるものに對するのである。有漏心とは我他彼此の迷執である、功利主義である、偏狹な利己心である。法性平等の理性に體達した上で、衆生を利樂せんとする、大慈悲である、これ法藏菩薩の願心にして「菩薩の智慧淸淨の業」（同七丁右）といへるもの、これから生れた「顚倒ならず、虛僞ならざる」（同）存在をかの世界の淸淨の相とするのである。そこで彼の世界を總括した三種莊嚴を「淨入願心」（論註下二五丁右）と稱し、「本、四十八願等の淸淨願心の、莊嚴せるところなるによつて因淨なるゆへに、果淨なり」（同）といはれてある。因の願心も、果の三種莊嚴も衆生のためといへる、爲物の存在のほか、何物でもない。この純乎たる利他ほど、淸淨なるものはない、この透徹した淸淨は、あだかも光りの淸淨なるが如くである。凡そこの世界のあらゆる存在において、光りほど淸淨なものはないといつていゝ。水や空氣は、淸淨なるに似て、しかも不淨である、光りはそれ自から淸淨にして、また他を淨化すること、この界の王である。しかればすなはち、佛身・佛土を、光りによつて統一し、光りの身、光の國といへるは、純乎利他の淸淨心から莊嚴せられた、眞にわれらがための存在なることを表示されたものとして、崇仰することができやう。已上のべたところは、身土不二といふことを、われらの信仰眼からながめて、解釋してみたまでゝある。しかしその眞相の不可稱不可說不可思議なるべきは、勿論である。

第五章　佛性の開顯

眞佛土卷も證卷とおなじく、殆んど引文のみで終始せられてゐる。その中初め正依や異譯の大經の御引文は、上述の光明身光明界に關するそれで、いづれも光明といふことが、中心になつてゐる（五丁右まで）。次に（五丁左已下）眞言經・涅槃經の御引文は、佛性中心であつて、前段にいはゆる光明の相の源底に光つてゐる、あるものに突入せられた觀がある（一九丁右初行まで）。次に淨土論已下終までには、必ずしも第一段の如く、光明中心に非ず、種々の勝相をあらはしたまふ御引文であるが、眼目は必顯佛性（二十九丁左）にして、第二段にいはゆる佛性を證顯する世界が、彌陀の淨土なることを明して、眞の佛土たる所以を、成立せられたものである。そこで一卷の大旨からいへば、身土不二は形式論であり、佛性論は本質論である。

第一節　佛性觀一班

一　總じてこの御書の中で、佛性問題は行卷（四五丁左）と信本（二二丁左—二三丁右）と信末（二二丁左）と、この卷とに出で、この卷では涅槃經引文中の、諸所に出でゝゐる。而していづれの場合も、涅槃經の御引文

に局られてゐるから、原文では同一意義を有してゐるかといふと、それ〴〵特殊な意義を有するのである、從つてこの御書に御引用の場所にも、あらはさんとしたまふところは、それ〴〵異なつてゐるのであるが、彼此必ずしも一律ではないところもあるから、語を涅槃經にかりて、隨義轉用せられたものと見た方がよい。概して行卷のあの場所は行（廣くいへば敎・行・信・證）の哲學、卽ち他力の原理を說かんとするところであるから、佛性問題も亦た、これに關聯するものである、行が往生の因法となる所以は、平等の宇宙原理に基礎づけられてゐるによるのである。そうして宇宙原理は、何であるかといふと、それを行卷の所引の涅槃經の文では、實諦・一道・一乘等と名づけられてゐるのであるが、佛敎の通念では眞如である。しかし之をある一部の佛敎々學で考へてゐるやうに、自性淸淨の實在にとり切つて了ふのは、一乘家の所談ではない。諸法に具有するところの、無自性の理をいふのである、修行しさへすれば、佛まで行けるといふ理である。佛に限らぬから菩薩性・緣覺性・降つて地獄性でもありうる、それを佛性といつたのは、成佛の結果を歸納して、原理を佛性と談じたもののやうである。

二　信卷の末の方も、矢張りかういふ理佛性を、あらはさんとせらるゝものであらふ、本の方には所引の原文に、慈悲喜捨の四無量心を佛性としたり、信心を佛性としたり、佛果に佛性の名を付したりしてあるが、御引用の祖意は、他力の信樂をあらはすためである。前の行卷であらはされた宇宙原理に順應して、修顯したまふた阿

彌陀如來の御心を、全領したのが信樂であるから、信心卽ち佛性である。佛心は如何なる衆生にも、平等普遍に廻施せられ、一切衆生が一味の信心に住することを得るがゆへに、一切衆生悉有佛性といふのである。この信心獲得の境地を、一子地といはれ、御同朋御同行のことである。これはこの土の益で、因佛性である、その實現は彼土涅槃界である、これ果佛性である。淨土和讃にこの意を左の如く讃述せられてある。

平等心をうるときを、一子地となづけたり、
一子地は佛性なり、安養にいたりて證すべし。
如來すなはち涅槃なり、涅槃を佛性となづけたり、
凡地にしてはさとられず、安養にいたりて證すべし。

信心よろこぶそのひとを、如來とひとしとなづけたり、
大信心は佛性なり、佛性すなはち如來なり。

唯信鈔文意（五五丁）に「この信樂は、衆生をして無上大涅槃にいたらしめたまふ心なり、この信心すなはち大慈大悲の心なり、この信心すなはち佛性なり、佛性すなはち如來なり」とあるもこのこゝろである。

三　謂ゆる安養・涅槃・如來といへる境地が、佛性を顯現せる果海で、之を果佛性とす、いまの卷では、これをあらはすのが主眼である。但し、この卷における涅槃經の御引文には、必ずしも果佛性をあらはすものゝみではないが、宗祖の用ゐんとしたまふ點は、果佛性をあらはすにあつたと伺つてよい。眞佛土の御引文だからである。異名としての涅槃（六丁右）・如來（七丁右）（一〇丁左）・阿耨多羅三貌三菩提（一七丁右）・一切覺者（一七丁左）等、みな果佛性をあらはすものである。是等の名稱は、ひろくすべての佛の、所證の果德をあらはす普通名詞であるが、宗祖の一念多念證文（二三丁）及び唯信鈔文意（四九丁已下）の御釋を參考すると、通を以て別に奪ひ、阿彌陀如來の大悟界、卽ち眞佛土の固有名詞とせらるゝものゝやうである。唯信鈔文意のお釋を引いてみやう。

涅槃とまうすに、その名無量なり、くわしくまうすにあたはず、おろ〳〵その名をあらはすべし。涅槃をば、滅度といふ、無爲といふ、安樂といふ、常樂といふ、實相といふ、法身といふ、法性といふ、眞如といふ、一如といふ、佛性といふ。佛性すなはち如來なり。この如來、微塵世界に、みち〳〵てましますすなはち一切群生海の心に、みちたまへるなり。草木國土ことゞく、みな成佛すととけり。この一切有情の心に、方便法身の誓願を、信樂するがゆへに、この信心すなはち佛性なり、佛性すなはち法性なり、法身なり。

四　この一節にあらはさんとせらるゝ大趣旨は果佛性にして、その果佛性は、彌陀佛によつてのみ、修顯せられたものと解されてある。而して一切群生海の心にみち〳〵てゐる佛性とは、彌陀によつて修顯せらるべき、理

佛性を指せるものであらふ。宇宙間に、この理佛性を修顯し得たるものは、彌陀一佛あるのみだといふ見解から歸納すれば、この理佛性は、卽ち彌陀の理佛性である。卽ち彌陀佛性である、その體、無自性の宇宙原理なれども、彌陀でなくては、修顯しがたい佛性だとすれば、奪つて彌陀佛性といふを妨げない。しかもこれ宇宙原理として、一切に遍滿するゆへ、萬有は悉く、彌陀佛性に基礎づけられてゐる道理である。この道理に據れば、草木國土みな、彌陀に救はるべく、約束づけられてゐる。そこへ信樂といふ因佛性をうれば、みな果佛性を開顯するのである、これ眞佛土の境地なりといふ佛性觀である。故にこの文は、行卷の理佛性說、信卷本の因佛性說、いまの卷の果佛性說の三者を、綜合したやうな佛性論である。要するにこの文でも、行・信・眞佛土諸卷の所顯でも、佛性論は、たゞ彌陀についてのみ、なしうるところなりといふのが、宗祖特異の佛性論である。

第二節　開顯の過程

一　上述の佛性觀を基礎として、當然生じ來るべきは、かゝる佛性の開顯の方法如何といふ問題である。すでに佛性は、彌陀佛性なりと斷定し、その佛性、宇宙間のあらゆる存在に、みち〳〵て、救濟が約束づけられてゐる以上は、問題は、その開顯といふことだけである。これについて、いまの卷には、すこぶる簡單に、左のごとくいはれてある（二九丁左）。

惑染の凡夫、此におつて、性をみること能はず、煩惱に覆はるゝがゆへに。經に、われ十住の菩薩、少分佛性を見ることを得と說けり。故に知りぬ、安樂佛國にいたれば、必ず佛性を顯はす、本願力の廻向によるがゆへに。また經には、衆生未來に、淸淨の身を、具足し、莊嚴して、佛性を見ることを得るとのたまへり。

未來淨土に往生することのみが、佛性を開顯する唯一の方法である、淨土以外の場所では、佛性を見ることは、絕對にできないといはるゝのである、こゝに「本願力廻向によるがゆへに」とは、彌陀佛性は、一切衆生に周遍せりといへども、淨土に往生せざれば、之を開顯することはできない。しかるに淨土に往生すること、卽ち往相の敎・行・信・證はことゞく如來の本願力廻向であるから、佛性開顯の一伍一什には、毫も自力を加ふるところがないといふのである。

二　この「本願力廻向」の一句は、前に淨土論及び論註、讚阿彌陀佛偈・玄義分等によつて、彌陀の淨土の勝れたることをあらはしてあるが、かの世界は、彌陀超異の誓願に報ゐたる淨土であるからである。その超異の誓願とは、第十二・第十三の願を指す、この兩願の所顯は、前にいつた果佛性である。然れば淨土に往生して、果佛性を開顯することたるや、全く十二・十三の兩願のたまものであるといふ意味を、あらはされたものと解することをうるのである。これはすぐ前の引文により、廻向の範圍を狹く限定して果佛性をあらはすことを、願力の

廻向と味はふたのである。ところが證卷の結語（五丁左）となつてゐる

それ眞宗の教行信證を案ずれば、如來大悲廻向の利益なり。ゆへに若は因、若は果、一事として、阿彌陀如來の清淨願心の、廻向成就したまふところに、あらざることなし。因淨なるゆへに、果また淨なり。知るべし。

とある文を同顧すると、また往生の全過程たる教・行・信・證の四法を、願力で廻向されたお蔭と味はふことができるのである。これはこの卷と、證卷との關係を考へてみれば、證卷の結語は、卽ちこの卷の結語と見ることもできるからである。それから又、この卷は、この御書の眞實の五願六法の最終で、五願六法の終局目的は、かゝる佛性を開顯するの一途でなくてはならない、しかればいま、眞實五願六法の結論として、旣述の五願六法全體を總括し、之を通じてそれ〴〵基礎願の廻向にむかつて、感謝し禮讃されたものと見ることも出來るのである。いづれにしても、佛性の開顯が、この御書全編の目的である、證・眞佛土の本領である。

三　「惑染の凡夫、此において」云云とて、此土入聖の聖道所談と、まつたく異なることをいはれてゐるが、これ捨此往彼の往生思想をあらはし、もつて指方立相の淨土觀を示唆せられたものである。證卷ならびにこの卷には論註の引文がことに多いといふことは、これ淨土の問題につきて、曇鸞大師の指示に直參することを、示したまふの祖意とうかゞつてよいのである、曇鸞大師の指示とは、高僧和讃に

世俗の君子幸臨し、勅して淨土のゆへをとふ、十方佛國淨土なり、なにゝよつてか西にある。鸞師こたへてのたまはく、わが身は智慧あさくして、いまだ地位にいらざれば、念力ひとしくおよばれず。

嘆ぜられた通りであるが、これひとり曇鸞大師のみならず、一般淨土教徒としての、淨土觀の通念であつた、宗祖にありては、略文類の偈に簡單ではあるが「西方不可思議尊」と呼んで、明かにかゝる信念を表白したまふてある。それから又、「衆生、未來に清淨の身を、具足し、莊嚴して」といへる涅槃經文（眞佛土卷一一丁右所引）をそのまゝ用ゐ、佛性開顯の時を明示されてある。すでに此界を捨てゝ、彼の淨土に往生するといへるところに、現在と未來との、時間的の距りがなければならぬことは自明の理である、しかも卽身成佛一念頓悟の聖道所談との區別を、一層明かにしておくの要があつて、特にこの御釋に、この文を引用されたものであらふ。歎異鈔第十五章（二十七丁）には「煩惱具足の身をもて、すでにさとりをひらくといふこと、この條、もてのほかのことに候」と標して、かゝる聖道思想にかぶれたる、一類の念佛行者を誡められた一章があり、その終りに「淨土眞宗には、今生に本願を信じて、かの土にして、さとりをひらくと、ならひさふらふとこそ、故聖人のおほせにはさふらひしか」といはれてある。しかるにこの御書には、行卷の結嘆（四〇丁右）に「速かに無量光明土に到りて、大般涅槃を證す」とあり、信卷末の横超釋の下（四丁右―左）に「大願淸淨の報土には、品位階次をいはず、一念須臾の頃に、速かに疾く、無上正眞の道を、超證するがゆへに、横超といふなり」といはれ、捨此往

彼の時間の非常に速いことは示されたのみで、未だ未來思想を十分に反映されてはゐなかつたのである、そこでいまの「未來に」云云の語は、前の「此において」の語と共に、一字千金なりといふべきである。

四　總じて宗祖のお釋の上に、西方思想・未來思想を表示する文字が、割合におほく見えないのは、宗祖においては、これらの淨土教徒の傳統的な通念に關して、特に云ふまでもないことゝ、思惟せられたものであらふと思ふ。その代り現生正定聚の如き、宗祖獨創の教義については、實に反覆丁寧な、お釋がいたるところに見えてゐる。ところがその正定聚現益といふことも、往々誤解を招きたるものと見え、末燈鈔や御消息集には、これに關する記事がしば〳〵見えてある、左の一節は、末燈鈔第十四章所載の、慶信房から言上の中にあるものであるが、正定聚思想と往生思想と未來思想との分界を、すこぶる明白にあらはしてある（同鈔三四丁）。

眞實信心うるひとは、すなはち定聚のかずにいる、不退のくらゐにいりぬれば、かならず滅度をさとらしむ、とさふらふ。滅度をさとらしむと候は、このたび、この身のをはりさふらはんとき、眞實信心の行者の心、報土にいたり候ひなば、壽命無量を體として、光明無量の德用はなれたまはざれば、如來の心光に一味なり。このゆへに大信心は佛性なり、佛性すなはち如來なりと、おほせられてさふらふやらん云云

これに對して同意せられた宗祖の消息が、次の章に載つてゐる。（同三九丁）

たづねおほせられてさふらふこと、かへす〳〵めでたく候、まことの信心をえたるひとは、すでに佛になりたまふべき御身となりておはしますゆへに、如來とひとしきひとゝ經にとかれてさふらふなり

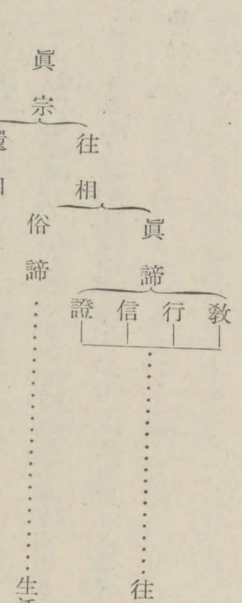
このお答の意義は、第十三章所載の眞佛房への消息の一節と對照して一層明了である。（同三二丁）

淨土へ往生するまでは、不退のくらゐにて、おはしましさふらへ・・・そののちは、正定聚のくらゐにて、まことに淨土へむまるゝまでは候べしとみえ候なり

これらの文は、佛性開顯の過程として、上に引ける必顯佛性の文（この卷二九丁左）と共に、特に重要なお釋である。

第六章　眞俗二諦觀

さきに信卷の最後において保留しておいた「信と生活」の問題につき、今章に略說しやう。これは眞俗二諦と稱し、眞宗敎義の綱格をなすものである、語は化土卷に出て、思想は信卷末にあらはれてゐるが、單なる一卷內の問題ではなく、この御書の全體を、眞俗二諦によつて總括することをうるのである。あだかも還相廻向が、證卷に明されてありながら、問題そのものとしては、證卷外に獨立して、別個の意義を有すると同樣である。



俗諦といふ言葉が、すでに往生淨土に關係のない事がらであるといふことを表示し、たとへこの事がなくとも、往生には少しも差支はないのである、そこで問題の性質として、別個獨立的のものと考へてよいのである。しかし信と深き關係があり、むしろ信がなくては成立しないほどのものであるから、信卷の中に明されてある。

第一節　日本佛敎の傳統的精神

一　眞諦・俗諦の語は、傳敎大師の作として引かれた末法燈明記の文に出でゝゐる。（化卷本三五丁左）

末法燈明記最澄製作を披閱するに、いはく、それ一如に範衞して、もつて化を流すものは法王。四海に光宅して、もつて風に乘ずるものは仁王なり。しかれば則ち、仁王法王、互ひに顯はれて、物を開し、眞諦俗諦、遞ひに因りて、敎を弘む、このゆへに玄藉宇內に盈ち、嘉猶天下に溢てり。

この文は國家を統治する仁王と、精神界を司どる法王とが、相より相たすけて、國民を開導敎化すべきことを明されたもので、仁王の道を俗諦とし、法王の道を眞諦としてあるが、これは政治と宗敎といつたやうな、大まかないひ方で、今日の眞宗敎義でいふやうな眞俗二諦ではないのである。大たい末法燈明記に政治を俗諦とし佛法を眞諦とされたことが、すでに二諦の應用であつて、二諦の元來の意味から、大分へだゝつてゐるのである。眞諦の元來の意味は、宇宙萬有の本體的方面をあらはすもので、不可知不可言の實在である、之れに反して俗諦は萬有の現象差別的方面をあらはし、可知可說の側である、だから眞諦も俗諦も、宇宙觀若しくは世界觀に關するものであるが、末法燈明記では現象差別世界の中の一部分の政治と宗敎を指したのであるから、二諦の應用にす

ぎないのである。

二　引用文は、そのまゝ本文と同視することを得るといふ見地よりすれば、これが眞宗の眞俗二諦の語の最初のものである。しかし化土卷の上では、何等眞宗教義としての、眞俗二諦の思想のあらはれを、見ることができないやうである。化土卷ばかりでなく、信卷においても亦た然りである。そこでこの言葉を生かして行かうとすれば、その思想を他の御書に求めなければならぬが、それについて御消息集の第二通にあらはれた思想は、末法燈明記の眞俗二諦と、同思想と見て、古來かの文を以て、二諦教義の起原とするものあるに至つた。文にいはく

詮じさふらふところは、御身にかざらず、念佛申さんひと〴〵は、わが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため、國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらはゞ、めでたくさふらふべし。（中略）佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念佛こゝろにいれてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれと、おぼしめすべしとぞおぼえさふらふ。

前段では、お念佛は我身のためではないが國家や、國民のために、となふべきものでゝもあるやうに見えるけれども、後段の意味をとり入れて解せば、佛恩報謝のお念佛である。そのお念佛を稱へつゝあるものとしては、國家の平和、國民の幸福を念願するのが、念佛行者の態度だといはれるのである。かゝる思想が、末法燈明記の二諦思想と合致するものなることは、多言を要しないのである、こうした國家至上主義は、丁度鎌倉時代のある時期

に擡頭してゐた時代思想であつて、榮西禪師の興禪護國も、道元禪師の祝國開堂もその現はれであり、日蓮上人の立正安國は、最も露骨にして大膽なものであつた。

三　國家至上主義は、夙に聖德太子の御唱導にかゝり、傳教大師の眞俗二諦、弘法大師の鎭護國家となりて、平安期に來りて再興し、さらに數百年を經て、鎌倉時代に復興したのである。かゝる傳統的精神は、建武中興の如き、明治維新の如き、國家非常時における志士仁人の活躍となりてあらはれ、印度や支那の佛教と、異なつた型において、佛教存在の意義を保持するところがあつたのである。かやうな傳統的精神を喚起して、眞宗教徒をして國家的關心をもたしめられたのがかの御消息文のこゝろである。しかしてかくのとごきことも、眞宗の二諦教義中の俗諦のそれに、包含されてゐることはもちろんであるが、しかもそれのみが、俗諦教義の全部ではない、なほ他に重要ないろんな要素をもつてゐることを閑却してはならないのである。それは何であるかといへば、如來を信ずる人としての目醒めである。これがむしろ二諦教義としての、より重要な要素で、中心的なものである。

第二節　宗祖の獨創的教義

一　信卷末は、總じて一念の信益を明したまふたもので、はぢめの方（二丁右）に現生の十益を數へ、中頃から後（十三丁左―三十七丁）に、阿闍世王の因緣を出されてあるが、その中心は眞佛弟子のお釋（六丁右）であ

る。文にいはく

眞の御弟子といふは、眞の言は、僞に對し、假に對するなり。弟子とは、釋迦諸佛の弟子なり、金剛心の行人なり。この信行によつて、必ず大涅槃を超證すべきがゆへに、眞の佛弟子といふなり。

これが中心であるといふのは、その次ぎに直ちに第三十三（觸光柔濡）の願と、第三十四（聞名得忍）の願とを引かれてあることより、しかく解してよいとおもふのである。けだしこの御書で願文を御引きになつたのは、各卷の初めと、此處と還相廻向のお釋の下とで、化卷の二願（第十九・第二十）を加ふれば、十願である。しかしてその引願の場所は、いづれも教義としての、重要部分をあらはさんがための、御用意であることをうかゞひうるのである。いまの眞佛弟子のお釋の如きは、一念發起後、盡形壽の信仰生活を總攝し、眞宗教義の俗諦側を內容としたもので、從來の淨土教には、曾つて見ることのできなかつた、獨創的なものとして、甚深な注意を要するところである。

二　眞佛弟子とは、「僞」に對するとあるは、下の化土卷の末の卷に明された、あらゆる邪教や迷信に簡ばれたものである。「假」に對するとあるは、同卷本の卷に明された、淨土の假門方便の教に簡ばれたものである。かくて眞佛弟子とは、弘願眞宗の行者、眞實信心の行人にして、この卷に明された一念發起の正定聚不退轉位のものを指すのである。この名は上（信本八丁右）に引かれた善導大師の散善義に出で、彼の文にいはゆる「佛教

に隨順し、佛意に隨順するに名づく」とあるを、今「釋迦諸佛の弟子なり」といひ、「佛願に隨順すと名づく」とあるを、今「金剛心の行人なり」といはれたものであるが、この佛教・佛意・佛願に隨順するものゝ、生活態度を指示されたのが、いまのお釋の直前の引文（往生禮讚の文）に、善導大師がいはれた、

仰ぎ願くは一切の往生人等、よく自から己れが能を思量せよ、今身に、彼の國に生ぜんと願ぜむものは、行住坐臥に、かならず心を勵し、己を尅して、晝夜に廢することなかるべし

のこゝろである。もとよりこの文は、前後の意味から推するに、念佛の正行に精進することを勸められたものであつて、すでに「よく自から己れが能を思量」してのこと、卽ちふかい宗教的內省に裏付られた報謝行であるから、慚愧の心と感謝の情とが、渾然一體となつたものである。而してそれを「畢命を期となして、かみ一形にあるは、少苦に似たれども、前念に命終して、後念に彼國に生じて、長時永劫に、つねに無爲の法樂を受く、乃至成佛までに、生死を逕ず、あに快しみにあらずや」と、この世にあるのも、いま暫らくのおもひで、懸命に勵めといはれてある。

三　かゝる渾然一體の慚愧心・感謝心こそ、上に一言したところの、如來を信ずるものゝ目醒めである。かゝる目醒めの發動し來るのは、かの第三十三願に「わが光明を蒙りて、その身に觸るゝものの、身心柔濡にして、人天に超過せん」との願意であらふ。それがまた第三十四願に「無生法忍、もろ〳〵の深惣持」を得た菩薩の相

であらふ。かくの如き慚愧と感謝との渾然一體相が、この眞佛弟子のお釋の、前後の文勢にあらはれた、金剛心の行人の生活態度である。これ實に信後の生活の中心をなすものである。さればかゝる實例を涅槃經にあらはれた阿闍世太子の因緣に求め、この御書では、全く前後に例のない因緣談を、しかも二十餘紙の長きに亘りて引用せられたのである。この因緣談を通じて見た阿闍世の全貌なるものは、たゞ慚愧と感謝との、渾然一體相であるといふことができる。このことはかの引用文を熟讀するものゝ腦中に、宛然描出さるゝところで、こゝに贅することを省略しやう。

四　ところがかうした生活態度は、如何にして誘起さるゝものであるか、第三十三願を引きたまふた祖意を推するに、觸光柔濡の誓約にもとづき、彌陀の願心が徹底すると、他力のおん催しで、おのづからさういふ具合になつて來るものであるとの、意味のやうにもうかゞはれるのである。すなはちわれらとしては、慚愧だの感謝だのといつたやうな、うるはしい心情は毛頭ないのであるが、他力から授けられて、かやうな心情がおこつて來るとの意味のやうである。もしさういふ考へ方によると、信後生活の中心をなすところのものは、畢竟他力廻向の信が、生活の上に流出して、さういふ作用をなすのであつて、信も生活も、ことゞ〳〵く他力佛心の顯現なりといはねばならない。かういふ考え方は、絶對他力を說く眞宗教義としては、まことに當然な行き方ではあるが、一般佛教々學の人性論として、猶ほ考慮の餘地があるやうに考へる。

第三節　二諦の本質と分化

一　阿闍世王の慚愧感謝の心情は、極めて漸進的にして、猛烈な瘡熱が機緣となりて、自己の殘虐きはまる過去の生活を、反省する痛烈なこゝろが擡頭し、六大臣を交々に招じて心懷を吐露して、慰安を求めんとしたが、ことゞ〳〵く所期に反した。最後に大醫耆婆の理解ある申言を容れて、大聖世尊の教諭に接したのである。而してこの引文により、彼れが信前信後の、生活過程を見るに、慚愧心も感謝心も、彼れの生來の殘忍、飽くところを知らざりし兇暴性が、漸次轉回の形式をとりて、正反對の善心となつたものゝやうである。彼れは後に世尊に向ひ（信末二九左―三〇右）自己の一念發起につき、伊蘭子から、梅檀の樹を生じたやうなもので、全く世尊の賜―であると感謝してゐるが、未だ世尊の化に浴せざる時、大醫耆婆は、彼れの慚愧心を讃嘆して（同二十丁―右左）この心あつてこそ人の人たる所以なりと稱してゐる。たゞし容易に人らしき人たることを得ざるがゆへに、佛陀も亦たこの人天の善を敎へたまふのである。信卷末（三九十右）所引の論註の文に「もし諸佛菩薩、世間出世間の善道を說きて、衆生を敎化するものなくんば、豈に仁義禮智信あることを知らんや。かくの如き世間の一切の善法みな斷じ、出世間の一切賢聖みな滅しなむ」と。

二　かうした考え方は、世間の善すなはち人道も、出世間の善卽ち佛道も、敎養を侍ちて、われらの生活上に

顯現し來るといふ考え方であるから、その教養さるゝ對象、いはゞ道德性、宗教性の存在を肯定するのである。これは前の涅槃經の思想と合致するものであつて、佛教の通念に順應するのである。しかもそれが論註の著者であり、他力廻向を極言された、曇鸞大師の人性觀であつたとしてみれば、上述の如く、俗諦生活までを、悉く他力廻向と見なければならぬ理由はないのである。眞諦の他力廻向なることは、議論を狹むの餘地はないが、俗諦生活にいたりては、無信・未信の分齊にして、猶ほ道德生活の可能を認むるがゆへに、信後のそれとても、亦た本具の道德性を、信仰の力によりて、覺醒せしめたものなりと解するも、何の不可かあらんやである。而してかやうな道德性の本具を、肯定したからとて、畢竟これ世間の善、有漏善であつて、生死海を出づるに足るものではないのである。從つて無有出離之緣の、機の深信には、毫も動搖を來さないのである。卽ち眞諦の側からいへば、有無同前である。しかれども俗諦教義に關しては、決して意義なきにあらずである。

三　もしも道德生活（俗諦）の起源を、信仰（眞諦）に求むるならば、信者は必ず道德者ならざるべからずといふ理論、ならびに信者にあらざるものは、道德者に非ずといふ理論が成立すると共に、道德者に非ざる信者は、眞の信者に非ずといふ理論も成立するのである。しかしこの三つの理論の成立を肯定すれば、當然道德生活の完成といふことが、信仰の完成を意味することになるのであるが、かくては、恐らく何人も、自己は道德の完成者なりと、思惟するものなかるべきにより、この世にあらん限り、救濟に安住の地なかるべく、卽得往生住不退轉とか、平生業成とかいふ教義に、動搖を生ずることになる。しかのみならず、眞諦は無漏淸淨にして、純善から、俗諦は有漏不淨の善であるが、かゝる有漏善が、無漏善からどうして流出するや。もしも有漏善を流出するやうな無漏善なりと思惟せば、彌陀佛界を冒瀆するものといはねばならぬ。それから又、眞諦なき道德を拒否せんか、世俗のいはゆる聖賢の道をも無視し、この世に尊敬すべきなにものをも認めざる、恐るべき憍慢心を增上するの結果となるのである。是らの不都合な點は、根本的に眞俗の分界を明了にしたる二元論において補ふことをうるのである。

四　二元論によれば、眞諦こそ他力廻向なるべきも、俗諦は人間本具の道德性に起源するものである。無信・未信の人と雖も、普通の道德的教養の結果、聖賢の地に達すること不可能ではあるまい。たゞし彼らをもつて、俗諦生活の人なりと稱しがたし、俗諦とは、眞諦によりて教養練磨したる、信仰的道德の異稱である。これは如何に教養し練磨するとも、界內有漏善の範圍を出でないから、救濟の成立には全く無關係である。眞諦は信仰的道德の教養練磨に向ひ、重要な役割りを演ずるものではあるが、しかもこれ餘力を用ゐるにすぎず、目的はたゞこれ往生の一路なるのみ。かくのごとき見地に立ちて、眞俗の分化を、時間・空間・二尊・悲智等・種々の標準により定めてみると、概ね次のやうである。（小著「信と生活の教義的考察」第十章參照）

（イ）時間、眞諦は現在と未來との、二世に通ずるが、俗諦はたゞ、現在一世に限る。未來往生の信仰に安住し

て、正定聚の行業たる、稱名念佛を相續するのが眞諦であつて、これと同時に自己及び他人、乃至國家社會に對する道を遵守するのは、いづれも現在一世の俗諦でめる。

（ロ）空間、出世間の道が眞諦にして、世間道が俗諦である。人と佛との交渉を前者とし、人と人との關係が後者である。領解文でいふと、安心と報謝と師德は眞諦であり、第四の法度は俗諦である。嚴密にいへば、自分を信仰に導いてもらふた先達ならば、親でも兄弟でも我子でも、みんな師德に收めて、眞諦の側に屬する道理であるが、人としての親しみも加はつて、その恩を感佩するやうなことが、俗諦の妙趣である。

（ハ）二尊、釋迦彌陀二尊にあてると、彌陀の大悲攝取は眞諦である、釋迦の作善止惡の勸誡は俗諦である。第十八願の唯除等の制止も亦、彌陀の誓願の中に收めて、罪の重いことを知らせて、反つて之を攝取したまはんとの、慈悲の現れであると味へば、俗が眞に收つて、彌陀は唯眞諦となり、之に對して釋尊の大經悲化段の說法は信後の生活に就て、諸惡莫作衆善奉行の、佛敎の通規を宣說したまひし俗諦の敎である。

（ニ）悲智、彌陀を慈悲門と智慧門とに分けて考へると、慈悲は平等であつて、一切を包容する、眞の一門であり。智慧は差別の諸相を照すゆへに、善惡を辨別して、惡を排して善につかしめんとする俗諦門である。

（ホ）其他、自他に分けると、往生は一人〳〵の淩ぎ、全く個人的のものであるが、俗諦は自己以外の存在に對して、起り來る對他的のものである。又內外で申すと、眞諦は深く內心にたくはふべきもの、卽ち內德である、俗諦は外部に向つて、發動するところのはたらき、卽ち外用である。又變と不變とでいふと、眞諦は始終一貫、萬人共通の、純一不變なものであるが、俗諦は時と處と位とに從つて、いろ〳〵に變通自由なるものである。

第七章　教行信證教義の特異性

一

前章にのべたるところは、純末來主義を以て、一千餘年を貫きし、淨土教の傳統的精神を、眞諦門の上に發揮し、建國已來の日本國是ともいふべき、國家至上主義と、眞宗獨特なる信仰的道德觀とを、巧みに調和せしめて之を俗諦門の內容としたる、眞俗二諦の教義の概要であつたが、問題が問題だけに、未だ俗諦門の側において、究明せらるべき、幾多の問題を保留しつゝも、すでにこの思想を、この御書にあらはされたことは、淨土教義史上に一時代を劃せるものといふも不可でない。

二

次に教より證にいたるまでが、ことゞく願を基調とし、むしろ願の開說となつてゐるのは、つまり願主・阿彌陀佛の說明である。故に眞宗とは彌陀を說き、彌陀を知るの教にして、彌陀を知るところに、われらの救濟の道は、開かるゝものなることを示されてゐる。これ他力思想圓熟の結果にして、從來の淨土教は、この點において、猶ほ階梯的たるを免れなかつた。而してかく彌陀を說明することによりて、自己の內に、佛を討ねんとする聖道門に對して、如來の內に自己を見出さうとする、淨土門の特色を最も遺憾なく發揮せられたのである。

三

次は願の見方である、善導大師や法然上人の如く、第十八の一願を取るに非ず、天親菩薩や曇鸞大師のごとく多願によるに非ず、五願によりて六法を開き、之を眞實の卷とし、さらに又假の二願によりて、化身土の卷を作らる。しかも彼れ所廢なる邊より、前五卷に對すると共に、階梯的教義として、前の五卷の序分たる地位にあつた。かくの如き徹底し周備せる本願觀は、實にこの御書の特色である。

四

次に三經中ひとり、大經を以て眞實の教とし、之れによりて前五卷をあらはされたことである。眞實とは隱顯なきをいふのである。すでに隱顯を見る已上、他の二經と、大經との一致點あるを示唆してゐる。これによりて三經差別觀と、三經一致觀との、二種の見方があることを知るのである、かくのごとき三經觀も、實にこの御書によりて發表せられたのである。

五

行卷の大行釋は、實に從容不迫にして、見るものをして、望洋の歎あらしむるほどに、綽々たる餘裕を有してゐる。久しき已來の通念として、行といはゞ、三業の動作にかゝるものとせられてをつたのに、行卷に破天荒な行釋いでゝ、傳統の型はみごとにやぶられ、名號をも、願力をも、行といはるゝものなることが、わかつて來たのである。しかもこれ宗祖の創造に非ずして、經論釋を讀破せるの結果であつた。この卷のお釋ありて、他力の絶對性がすこぶる鮮明にされた感がある。

名号ハ願力ハ、共に行といわるゝものなり、然るに、称名を亦、行とするは、誤られしなり。

六

他力の行は他力の信と、全くその心懷を同じくするものなることがわかり、往生の因法として、或は行とするあり、或は信とするありて宗祖の御著のみならず、經論釋の諸所に、矛盾するが如きお釋のあることも、容易に會通消釋ができるやうになつた。

七

行の蔭に、日かげものゝごとかりし信が、堂々獨立して、それのみで、往生の因法となることが、信卷により て示されたのである。經論釋にもすでに、その意はほのみえてあつたが、今卷において、實に大膽に赤裸々に發表された。由來、眞宗とは信の宗教なりと謂ひうるにいたつたのである。

八

信とはわれらの精神上の事實であるから、機邊のものであるのに、之を本末に分ちて、如來の信が印現したるもの、卽ちわれらの信なる所以を詳說された。これ他力の極意をあらはせるものである。けだし唯信往生を談ずといへども、信の他力廻向なることを談ぜざれば、他力救濟の意義が徹底せず、しかるにこの釋あり、錦上さらに花を添えたるものなるを覺ゆる。

九

信末において、一念往生・平生業成の義を談ぜられた。これは他の異流のすべてが、臨終來迎・正念往生を談ずるものに、簡ぶところの眞宗の大なる特色である、現生の十益を嘆じつゝも、みなこれ法德に約し、迷信を挾むの餘地なからしめ、信と證と卷を分つことによりて、滅度密益の濫なからしめられた。實にこの一念業成の

談は、利刀中の利刀にして、運用をあやまれば、大害を招くにいたる、細心の注意を拂はれた所以である。

一〇

信證直接は、唯信正因の義を極成されたもの、往生即成佛は、證の究竟性をあらはされたもの、いづれも證卷所明の特異教義である。さらにすゝむで眞佛土卷には、身土不二の義をあらはされたが、これ彌陀大悟界の超異性を示されたものである、而してまたこれ、われらの最後到達境であると共に、教・行・信・證の法義の淵源をなし、救濟工作の策源地となるのである。

以上は主として、この御書の外廓的觀察にもとづいて、しばらく十個の特異性を數へてみたにすぎない。さらにその内容に入りて之を攝はゞ、行卷の六字釋のごとき、行・信・眞佛土卷所出の佛性問題の如き、證卷の第十一願觀の如き（化土卷は略す）、いづれもこの御書の特殊的解釋であることを附記して、擱筆する。

（昭和一〇、九、二九）

聖典講讃全集第十一回配本・昭和十年十月十日印刷・昭和十年十月二十日發行・編輯者宇野圓空・發行者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎印刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・・發行所小山書店・版權所有宇野圓空及小山久二郎